〔書　評〕

小倉肇著

『日本呉音の研究』

林　史典

一

河野六郎「「日本呉音」に就いて」（東京教育大学言語学研究会『言語学論叢』最終巻 1976）は，朝鮮漢字音をはじめとする字音研究の広い視野の下で，日本呉音の特質に鋭く迫った名論文であるが，その冒頭には次のように述べられてある。少し長いが，本書の意図とも関係するので引用したい。

かねて漢字音に興味を持っていた筆者にとって日本漢字音は常に気になる存在であった。朝鮮の漢字音については筆者は一往の粗描を試みたことがあり，越南の漢字音については三根谷徹氏の労作が公にされている中で，日本の漢字音のみが正面から採り上げられていないのは何と言っても気がかりな事である。しかしこれにはいろいろな事情がある。第一に日本には字音資料が夥しく伝えられ，この資料の調査だけでも大変な労力が要る。（中略）

筆者は若い頃，太田全斎の「漢呉音図」に興味を覚え，筆写などして遊びふけったことがある。これが日本字音についての先入見を植えつけ，いまだにそこから脱却できないでいるが，この本の附録に「漢呉音徴」というものがあり，いろいろな字音資料の引用がなされている。これで悉曇とかハングルに始めてお目にかかったわけであるが，この「漢呉音徴」のいわば現代版ともいうべきものを作ろうというのが抑ものきっかけ（＝小松英雄助教授（当時）との共同講義のきっかけ）である。つまり，然るべき典拠のある字音を誰にでも使えるように考案された資料集を作成したいと思ったのである。しかし上にも述べたように伝存の資料は厖大な数に上り，之を網羅することは殆ど不可能なことである。そこで当然資料の選別ということが考えられてくる。そのことを小松君に計り，同意を得たので，共同講義が始まった。しかし若干の資料を学生諸君の協力を得て報告して貰って文字通り眺めている中に荏苒として数年経ってしまった。今でもこの宿望は持ち続けている。恐らくその実現の端緒に就くに至らない中に終ることだろう。他日，篤志家が現れてこの面倒な仕事を完成してくれることを願うものである。

「後記」に，文献資料の個別的整理・検討だけでは日本呉音の全体像が見えず，従って量的・質的・時代的な諸条件を満たす文献資料の調査・検討が必要であることを述べた

著者は，恐らく河野のこのような考えと共通の認識を持ち，方法や構成も概ね河野『朝鮮漢字音の研究』(1968)，三根谷徹『越南漢字音の研究』(1972)を襲って成ったのが本書だと言うことができる。

一体，日本字音には歴史的資料が多いだけでなく，それ自体が複雑であり，呉音・漢音・唐音などといったいくつもの伝承が存在する。日本語がこのように異なるいくつもの字音を伝えてきた大きな理由は，歴史的に仏家・博士家などという伝承母体が存し，文献ごとに特定の字音を用いる伝統を有したからである。しかも，そのようにして伝えられた各字音がまた，必ずしも単純ではない。漢音は単層的であると言えても，呉音や唐音はそれ自体が複層的であって，新旧の音を混じ，いわばそれぞれの字音の主層に認められる主な特徴によって他の字音から区別されているに過ぎないといった観がある。

そうした混沌を解き明かすためには，それぞれの字音について各層の特徴的事実をsynchronizeし，それに基づいた体系化が試みられなければならない。その前提として是非必要なのが，厖大な資料の調査とそれに基づく字音索引の作成である。後述のように，その意味で本書の資料篇（第II部）と索引篇（第III部）が今後の日本字音研究に与える利便はきわめて大きい。

本書が研究の対象とした日本呉音について言えば，仏家が最大の伝承母体であり，最も有力な歴史的資料は法華経，大般若経関係の音義や点本である。金光明最勝王経，華厳経の音義など，他に注目すべきものも少なくないが，特に法華経と大般若経に関しては伝存する文献が多く，ある程度は伝承過程の解明を可能にする点に大きな価値が認められる。ただ，字音も個別の仏典の読誦音として伝承されている以上，日本呉音の研究にはさまざまな読誦音を総合した考察が必要なことは言うまでもない。そこで，日本呉音の研究に必要な基礎作業とそれに基づく考察については，法華経の音義・点本類に限定せず，著者の言うように時期を考慮しながら仏典ごとに選別された主要な文献を用いる方法もあり得たが，本書が敢えてそれを採らず，

> 本論考は「法華経読誦音」による「日本呉音」の研究ということになる。(15頁)

という立場に立ったのは，読誦音間の差異は有っても微細であり，実質的には法華経読誦音をもって日本呉音を代表させ得るという見通しを持ちつつ，伝承過程から明らかになる事実についても，それを重視しようとしたからであると思われる。

二

全4冊，総計3700ページを超える大著の第I部は「研究篇」で，次のような構成をとっている。

I　序説
II　日本呉音の資料
III　中国音韻学

IV　中古漢語と日本呉音

「I　序説」は，「本論考の構成」「法華経読誦音と日本呉音」「日本漢字音の研究方法」等に関する概説，「II　日本呉音の資料」が，本書の考察対象である法華経の音義33本，字音点9本の解題であるが，標題から期待されるところと異なって，「法華経読誦音と日本呉音」「日本漢字音の研究方法」に法華経読誦音の性格や字音研究の方法等に関する深い議論がなく，「II　日本呉音の資料」も個別資料の解説に終始しているのは，本書が，調査と記述を優先させ，それに基づく本格的研究は将来に委ねたことを示すものと考えたい。

続く「III　中国音韻学」は，中古漢語を中心とする中国語音韻史の概説，「IV　中古漢語と日本呉音」が「研究篇」の中核をなす日本呉音についての分析と記述である。この中，IVでは基本を河野『朝鮮漢字音の研究』，三根谷『越南漢字音の研究』に倣い，「声母」「韻母」「声調」に分けて，中古漢語の体系に基づく詳細を極めた記述がなされている。

まず，「声母」については，三根谷に倣って口蓋性介母の差異を区別した頭子音ごとに，中国中古音（以下「中古音」）との対応関係とその異例が示され，最後に「声母総論」として，対応表と「清音と濁音」「有気音と無気音」「非鼻音化現象」「軽脣音と重脣音」「舌頭音と舌上音」「歯頭音と正歯音」に関する検校の結果が示されているが，記述が精緻なだけに，それと比べた結論の物足りなさは否定できない。

「清音と濁音」では，清・濁に関する異例のうち，〈母体となった原音の反映〉と解することができる事例を掲げるにとどまっている。しかし，日本呉音の清・濁については論ずべき点が多く，著者の触れた先行研究にも吟味を要する所が少なくない。それらを踏まえた検証が必要であったように思う。例えば，評者の調査によると，原音の清・次清音字が法華経読誦音の濁音で現れる比率は概略6～7%。それに対して，疑母を含む全濁字が清音で現れる比率は，34～35%に上り，呉音系字音の母体の一部にも全濁字の無声化が存在したことはほとんど確実である。ただし，この数字には声符による類推，新濁，漢音系字音の混入などによって乱された音が含まれているから，可能なかぎりそうした例を排除すると数値がどう変わるのか，また，文献によってその数値はどう異なり，あるいは異ならないのかなど，本書のような考察を通じてしか指摘できない事実への言及も期待された。

全濁音の無声化や，軽唇音化とならんで唐代の声母を襲った大きな変化は頭鼻音の非鼻音化である。唐代長安の読誦音を母体にすると考えられる漢音系の字音はこれを反映しているが，それ以前から慣用されてきた呉音系字音の声母には勿論その影響がない。ところが，法華経読誦音の一部には「尾 ビ」「舞 ブ」のように漢音的特徴を示しながら，声調は呉音的声調に従い，しかも純粋鼻音に対応する音形が他の古文献にも見出せないものがある。これを原音に帰せしめるべきか否かについては，慎重を要するが，一方，「蔑 メチ → ベチ・ベツ」のような，明らかに漢音系字音の混入と見なすべきものもある。こ

のような事例を通じて，伝統的な仏典読誦音の性格と変質を如何に考えるかも，大切な論点の一つであったと思われる。

「総論」に取り上げられていないが，匣母の合口も日本呉音で問題となる点の一つである。すなわち，これには「活 クワチ」「還 グエン」のように kw-，gw-となる場合のほか，原音の γ-を失って「会 エ」「横 ワウ」のように w-を示す場合があり，原音と両者の関係が明らかでない。漢音系の字音には w-が無く，逆に古い万葉仮名には w-型が存すること，比較的 γ-を失う例が多い蟹摂合口について見ると，古層と考えられる単母音化した音に限ってそれが認められること等，w-を古形と推定する理由がある一方，中国語音でも広州方言のように w-を示す方言があること，朝鮮字音でも稀に γ-が脱落する例があること等，w-を母体の特徴に由来すると考える理由も存在する。その w-と，匣母の基本形 g-（k-）との分布を「相補的」としたのでは重要な事実が見失われかねない。

なお，一部の法華経音義に伝えられた'和製反切'の反切上字に窺われる舌頭音と舌上音，歯頭音と正歯音の区別については，その可能性を疑う本書の見方が支持されよう。

三

「韻母」に関しては，三根谷「韻鏡と中古漢語」（『中古漢語と越南漢字音』1993）等にもとづいて-α 系〈I 韻類〉，-a 系〈II 韻類〉などの 10 韻系を分け，韻目ごとに中古音との基本的対応とその異例が示されている。やはり記述は詳密を極め，韻系単位にまとめられた一覧表は，よく中古音と日本呉音の関係を捉えている。もっとも，末尾の「韻母総論」において「一等重韻」「二等重韻・四等韻」「拗音韻母（III B 韻類）」「拗音韻母（III A 韻類）」「韻尾（F）」「フ入声」「長音表記」を取り上げ，最後に「日本呉音韻母対応表」と「日本呉音音節表」を加えているが，「声母」の場合と同様，事象の整理とその結果の提示に重点が置かれすぎ，考察が従来の水準を深化させていないのは惜しまれる。

「一等重韻」「二等重韻・四等韻」で問題の核心が不鮮明になってしまったのは，事例を韻目ごとに整理せず，重韻を含む韻系ごとの対応関係を捉えることに拘ったためと思われる。また，日本呉音における重韻の現れ方に注目するなら，当然三等韻にも言及すべきであったであろう。その三等韻については「拗音韻母（III B 韻類）」「拗音韻母（III A 韻類）」で考察されているが，やはり韻系を基本とした中古音と日本呉音との対応関係の体系化が著者の関心になっている。

「韻尾（F）」「フ入声」では，その表記と，対応の異例が整理されており，法華経の音義や点本における多様性を概観できる。評者にとっては，-t 韻尾の-チで表記される率を示した表など，たいへん興味深かったが，全体として音そのものに対する踏み込んだ発言には慎重で，結果としてそれが論を平板なものにしている。そうした例の一つが「長音表記」で，天福本・大谷大本の'長音表記'をまとめて掲げるだけでなく，このような文献のこうした特徴的表記が一体何を意味するのか，著者の見解が示されたかった。

「日本呉音韻母対応表」は，韻系ごとに掲げられた中古音・日本呉音の対応表を，日本呉音の韻部を基本とする表にまとめ直したもので，両音の関係を体系化して見せた点に価値が認められる。しかし，声母・韻母を総合した「日本呉音音節表」については，それを「音節」表とする以上，日本字音を音節構造上どのように解釈するのか，中国語音の構造とともに日本字音としての歴史的変化を踏まえた説明が必要である。

「韻母総論」を通じて，最初に設定された中古音の枠組みの中での考察に傾いた結果，日本呉音固有の問題に照準が合わなくなった恨みも小さくない。河野「朝鮮漢字音と日本呉音」(『末松保和博士古稀記念論集—古代アジア史論集』1978) は，満田新造「朝鮮字音と日本呉音との類似点に就いて——朝鮮に於ける字音伝来の径路」(『東洋学報』15-3　1926) を承けて，単母音化，外転二等韻，咸摂一等重韻，山摂元韻，通摂三等韻，臻摂の欣・真韻と深摂の侵韻，曽摂入声，合口要素の脱落，三等乙，舌内入声などを論じており，いずれも日本呉音にとって重要なトピックである。これらについても主要な点は既に概略が明らかであり，議論は自ずから微細に入らざるを得ないが，本書のような研究によってこそ，このような問題に対する詳細な検証が可能であったであろう。例えば，蟹摂・流摂の単母音化は日本呉音に特徴的であるが，この2摂を含めた単母音化が実際に法華経読誦音でどのような現れ方をするのか，また，合口要素は法華経読誦音でどのように保存され，どのように失われているのか，いわゆる三等の乙は，特に現れ方の複雑な歯音を中心にどのような状態を示すのか，全貌の提示と付随した論が期待された。

「声調」では，入声を除く諸字を中古音の声調と対照してその結果を示し，併せて〈東点〉〈徳点〉〈任意声〉の例を挙げている。蓋し，法華経音義のように日本で作られた音義の声調はその性格が難解であって，無条件に各字が固有の声調を示しているとは断言できない。第一，読誦音の声調そのものが問題であり，伝承の過程で固有の声調が変化している可能性を否定できない。この点を解明するのは容易でなくても，音義によっては，明らかにその声調が読誦に際して生じる変化や語音としての声調を反映していると見なすべき例が少なくない。例えば，心空『法華経音訓』(至徳本) はそのような字例を多く含む音義の一つである。中古音の声調と対照する前に，こうした問題に対する詳しい事実の把握と検討が不可欠であったように思われる。

「声調」の最後に掲げられた数値は，概ね従来の調査結果と一致しており，中古音の平声はおよそその8割が日本呉音で上・去声，同じく上・去声はその6〜7割が日本呉音で平声となっている。醍醐寺本『法華経釈文』に「平声ノ字ハ都司馬音ニハ渡上去音，上去(ノ)字(ハ)対馬音(ニハ)渡平声」というのは，恐らくこのような傾向を指すものであろう。ただし，沼本克明 (「呉音系字音の祖系音について」1978)，高松政雄 (「呉音声点の性格」1980) によると，『類聚名義抄』の和音注や『金光明最勝王経音義』の声調などとの間には数的差異が認められる。また，声調は中国語の音韻史においても清・濁と密接な関係にあり，評者の調査でも，院政・鎌倉時代の法華経読誦音は，中古音との対応で清・濁の違いに

よる数値の差異を生じている。これらも，注目されるべき論点であったと思う。

四

本書の第II部は，「法華経音義掲出字対照表」と「法華経音義字音対照表」から成る「資料篇」である。

「法華経音義掲出字対照表」は，音義33本，字音点9本の掲出字と音注を対照させたもの。それぞれに法華経本文とその所在および校異，『広韻』の反切と三根谷による中古音の音韻表記および声母，韻類（韻摂，韻類および韻母の通し番号）を付して，本文や中古音との照合の便を図っている。配列は巻音義順，すなわち経文に出現する順序に従い，採録字の範囲は無量義経字・観普賢経字，および「両音字」「異音字」「口合字」「呉漢同声字」に及んでいる。音義33本は勿論，現存本を網羅したものでなく，字音点9本は現存本の一部にすぎないが，もとよりこのように広範な文献の調査と整理に完璧を期すこと自体が無理であり，単字によって伝統的な法華経読誦音の実態を窺うには十分な量と質を有していると言える。今後の日本字音研究に，きわめて大きな貢献をする労作であることを強調したい。

「法華経音義字音対照表」は，「法華経音義掲出字対照表」を中古音の体系にもとづく表に編成したもので，中古音の枠組みを通して掲出字ごとに各文献の音注を比較・照合でき，同時に掲出字番号と文献の略号によって「法華経音義字音対照表」中の所在や文献名を知ることができるよう配慮されている。ただ，本書は全体を通じ，中古音を三根谷の再構によっているので，この表についてもその体系を確認した上で利用しなければならない。

第III部の「索引篇」は，「法華経音義字音注一覧」「法華経音義掲出字索引」と「九条家本法華経音 音注・掲出字索引」から成っている。

「法華経音義字音注一覧」は，「(1)字音注一覧」「(2)字音標目一覧」に分かれ，前者が「法華経音義掲出字対照表」および「法華経音義字音対照表」の索引を兼ねた五十音順の字音注一覧，後者は法華経音義に用いられる字音分類の標目ごとに，「法華経音義掲出字対照表」「法華経音義字音対照表」採録字とその音注を検索するための索引である。これに次ぐ「法華経音義掲出字索引」が，「法華経音義掲出字対照表」「法華経音義字音対照表」における掲出字の部首別索引，「九条家本法華経音 音注・掲出字索引」は，文字どおり九条家本法華経音についての音注一覧と掲出字の部首別索引である。周到な配慮による一覧表や索引ではあるが，検索手段をページによらず，掲出字番号（コード）や，韻類・韻母の通し番号等としたことに，些か使い勝手を損なった面があろう。

第II部の「法華経音義字音対照表」と合綴された第IV部の「中古漢語（広韻）音韻表」は，横に声母，縦に韻母・声調を配した52枚の中古漢語音韻表で，三根谷の体系に従った図面には，『広韻』の小韻代表字と反切が収められ，それに『切韻』諸本との校異を加

えている。表中の文字は付載の索引によって検索できる。

五

以上，率直な感想を述べたが，本書の真価は何と言っても厖大な資料の調査と，さまざまな角度からの整理・分析，それにもとづく詳細な記述にある。本格的な研究成果は今後に待つとして，これまでに，これほどまで大規模で体系的な字音資料の調査と記述は存在しなかったし，従ってこれから本書が提供する利便にも計り知れないものがある。

このような調査や記述によって，字音研究はさらに効率と精度を高めるであろう。しかし，精密化にともなって，特定読誦音の研究に集束する危険性も有している。著者も引用するように，有坂秀世（『国語音韻史の研究』1944）は，国語音韻史研究の立場から，

> 支那語音韻史に通ぜずして国語音韻史を語ることは出来ず，又，国語音韻史に通ぜずして支那語音韻史を語ることは出来ない。

と述べ，河野（「「日本呉音」に就いて」）は字音研究を日本語（史）研究に位置づけて，

> 日本字音の研究は日本語音韻史研究の中に包摂せらるべきものであろう。そしてその意味でまだまだ為すべき事が多々あると思われる。しかし結局は日本語音韻史研究の傍流にすぎない。

と述べた。字音研究に対する関心には，さまざまな角度があり得るが，それを日本語研究に位置づけようとするかぎり，夙に小松英雄（国語国文学研究史大成『国語学』1961）が示唆した，「本来の国語音と字音とが，どのようにからみ合いながら体系的に変化してきたかという，いわば生態史的研究」は必然である。本書のような成果が，一般言語材としての字音の研究に発展し，日本語音韻史に融合することを期待したい。

（1995年1月6日発行　新典社刊　A5判　4冊　計3703頁　本体価格107120円）

——筑波大学教授——

（2000年4月6日　受理）